

Urban Design Lab. Magazine

2017.03.31 vol. 263



研究室への置き手紙

M e s s a g e s f o r D e a r U D L a b . M e m b e r s

西村研への置き手紙 p.2
最後の登壇 -西村先生最終講義- p.6
追いコン&卒業旅行FLASH報告 p.7

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/>

編集長： 松田季子
編集委員：神谷安里沙 田中雄大 中村慎吾
岡山紘明 但馬慎也 中戸翔太郎

西村研への置き手紙

Messages From Graduating Academics And Students

今春、3人の博士過程学生と5人の修士課程学生が学位を取得し、一部のメンバーは引き続き研究室に残るものの、ひとまず全員が卒業することとなりました。片や教員陣のほうに目を向けると、西村教授が本年度をもって退職し「西村研」の歴史に幕が下ろされるほか、森助教の栄転が決まり、研究室の体制はこの春大きな様変わりを迎えます。

そんな転換期に研究室を「卒業」する教員・学生一同から、研究室に向けてメッセージをお届けします。

神谷 安里沙



▲ パース練習してないことを後悔するコンペ

勢いで出願して、受験して、なんか受かってしまったところから始まった、私の都市デザイン研究室生活。始まってからも、プロジェクト、スタジオ、授業、マガジンと怒涛のように時間が過ぎていく。流れていくのか流されているのかもよくわからないまま辿り着いた今日。身動きの取れないほど密度の高い2年間でした。あれもこれもやりたいと張り切った結果、修論にとりかかるのが遅くなってしまったこと、全体を通して体調を崩しがちであったことは反省です。

スタートは遅くなりつつも、修士論文で一部を切り取った「水辺が裏から表へなっていくこと」には学部卒業制作の頃から興味がありました。当初の興味の形と場所からは離れつつも、学部時代の角度からは上手く形に出来なかったテーマに数ヶ月間取り組むことが出来たことは本当に幸運です。魅力的なことが多く目移りしつつも、心に1つ留めておく興味があることは、後になって自分を助けてくれました。

2年間プロジェクトなどで人と語らう中で、視点や考え方が変わったことや自分に足りないものを実感します。しかし、とりあえず目の前をひたすらにやってきた正直自分が具体的にどう変わったのかは判然とせず。社会に出る中でゆっくり噛み砕いて、また別の場所で改めてこの研究室で得たことを研ぎ澄まさせていけたらと思います。先生方、研究室の皆さま、本当にありがとうございました。

三文字 昌也



▲ 修論中泊まり込んだ研究室から外に出ると、雪が深く積もっていた

都市デザイン研究室。学部時代から研究室にお世話になっていたわけですが、先生をはじめとするスタッフ陣の思い、卒業生の皆さんのやってきた研究、過去と未来のプロジェクトなどなど、研究室の培ってきた歴史の重みと将来目指していくものを理解するためには、学部の1年間、修士の2年間という時間では全く足りなかった。修士を終えたいま、そんなことをひしひしと感じます。でも修士を終えてようやく、研究室が目指す方向を嗅ぎつけ示すコンパスのようなものがちょっと身について、研究室の一員としてこの流れを作っていく方にコミットできるようになったのかなとも思っています。今年度は何より、西村先生の退官関連行事を目の当たりにすることができて、そのコンパスが研ぎ澄まされた気がします。西村先生のご退官は実に淋しい一大転機であったわけですが、一方、西村先生の語られる言葉から、研究室の原点とこれからを（私ごときでも）改めて考え直すことができる素晴らしい機会でもありました。一番心がけたのが、研究室は研究室でとどまってはいけないということ。西村先生門下の「家族」という言葉がリレーションシップで使われていましたが、学内外、ひいては国内外各地にそういった研究と実践の仲間がいる、そしてそれぞれの場所に現場があるという非常に貴重な状況を、私たちは継いでいく必要があるのだとしみじみと感じています。西村研究室にさよならを言わなければならないことも、私は都市デザイン研究室にはまだまだこれからもお世話になることとなります。今年に限っては「残る」という選択も非常に寂しく感じるわけですが、何れにせよ、新しい研究室を作っていく皆さん、引き続き頑張りましょう。どうぞよろしくお祈りします。

田中 雄大



▲ 地域を想う人々との熱い夜会、非常にワクワクしました

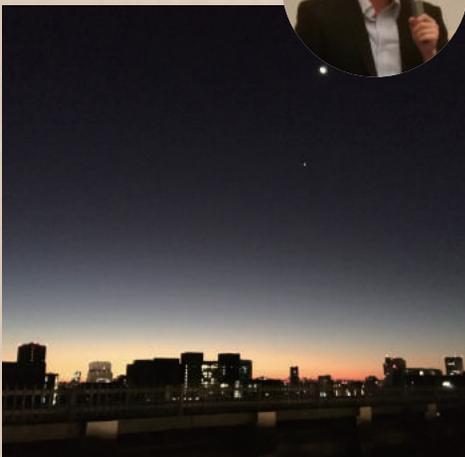
真っ白なキャンパスに一体どんな絵ができあがるのか、非常にワクワクした2年前の春の暖かな空気を思い出します。振り返るとあっという間に感じるものが年月だとしても、この2年間は質、量共に圧倒的な密度の中を駆け抜けてきた、その時々感情が鮮明に思い出せるくらいに充実した日々でした。このみずみずしい感覚が過去になってしまうことが今は少し寂しく感じますが、手元にあるキャンパスには、きっと2年前には想像できなかった絵が描かれているに違いありません。

都市デザイン研究室という自由な環境で、つい欲張って色々なことに手を出しました。「手を出しすぎずに一つのことに集中するべき」という言葉に耳が痛かったのですが、走り抜けた今、この欲張りは若さゆえのこととして、目を瞑るのもありかもしれません。何をするかは自分で決めることだから。ただ、「やりたい」という言葉の裏に、覚悟が必要であることは忘れないように。

研究室の内外で交わした多くの言葉は僕にとっての財産で、時に自分の無知を知り、時に勇気付けられ、たくさんの気付きを得ました。大切な言葉と出会うためには、日々の活動を通して問題意識を持つことが必須です。「都市デザイン」という掴みきれない言葉の意味を自分の中で形作ることが、この研究室に身を置く者として多少なりともできたと思っています。

都市デザイン研究室で教わった、専門家としての技能だけではなく、都市を当事者として楽しむ姿勢を忘れずに、これからもゆるりといきます。

中村 慎吾



▲ 10階テラスから何度も拝んだ朝焼け

短い2年間でした。

この2年間を振り返るにあたり最初に思い起こされることといえばやはりプロジェクト活動です。M1の4月に「やれることはやる」と意気込んでプロジェクトに飛び込んで以来、研究室生活は目紛しく過ぎ去ったように思います。ミーティングが週に何回も入り、そして毎度求められる成果物に妥協は許されない、そんな環境下で自分の能力の足りなさを痛感しながら2年間苦闘してきました。そんな辛い生活でしたが、その経験から得られた収穫は多くありました。そのなかでも最大の収穫は、自らの思考や作業における「当たり前」の水準が自ずと高められたことです。この研究室のプロジェクトは、やればやるほど良い成果が得られる環境があり、物事を行ううえでの基礎体力が相当磨かれたように感じます。

チームプレイたるプロジェクトに精を出す余り個人プレイの研究が疎かになってしまうという、主客転倒の研究室生活に陥っていたのも事実ですが、修士研究を差し置いてでもプロジェクト活動をしたことに後悔はありません（大きな声で言えませんが……）。それぐらいプロジェクトというものに育てられた2年間でした。

もちろんプロジェクトだけでなく様々な場で、先生方をはじめとする様々な方にお世話になりました。短い言葉の中では言い尽くせませんが、皆様ありがとうございました。

松田 季詩子



▲ 広島での学会発表後、夜の平和公園をそぞろ歩いた幸せな思い出

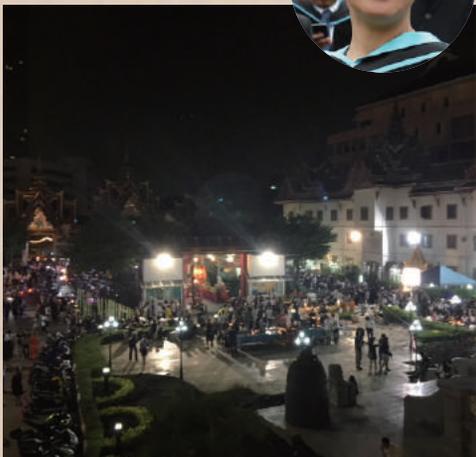
数限りないことを五月雨のように経験させていただきましたが、2年間を経て振り返ると、それらのうち本当に意味のないことは1つもなくて、まるで研究室生活の道しるべのごとく、違う時期、違う場所で開花し、背中を押してくれたと感じます。

中でも多くの方々の生きる姿勢に触れたことは、書物では決して得られない血肉の通った宝物になりました。「心の欲するところに従って、矩を踏まず」、初めて聞いたときから何となく頭に残っている、孔子の言葉です。時に憧れ、時に恐怖しながら、研究室の方々の真摯さとエネルギーがどこから来るのかについて考えたり、お話をすることで、またこの言葉を思い出しました。あるいは、「面白くするために、きっちりやるんだ」という地元の方の言葉を覚えています。

核となる思いに触れ、それを実現するための目標と努力を見聞きすることで、自縄自縛していたものから自由になり、肩の荷が下りるような気がしました。同時に、この人たちに胸を張れるように生きたいと思うようになりました。

こうして最高の2年を過ごさせていただいてなお、主語が自分回りのことばかりになってしまうのは大変お恥ずかしいのですが、開き直ればこれがまだ、自身のいるべき場なのかもしれません。ならば、私は私の持ち場で、これからみなさまへの恩返しをやっていきたいと思っています。

柏原 沙織



▲ 研究室旅行初日に迷子になり、皆を探して登った塔？からの眺め

修士課程から7年ぶりの博士入学直前、頭にあったのは柏で過ごした濃密な2年間でした。結果的に入学時に思い描いていたような研究室活動への参加はできなかったものの、都市デザイン研究室内の一人一人が持つ熱量に日々刺激を受け、背中を押されていました。

夫や娘と一緒に家庭を築く日々の中で、研究活動にどの程度重みをもたせて良いのか分からなくなることもありました。育児・研究・仕事…、自分の人生における重心が増える中で、選択肢の重みが年々増しているような気がします。その中でスマートな選択をしようと悩むものの、どの道を選んでも何らかの後悔はあるということを感じました。ただ確実なのは、チャンスが転がっている環境に置かれた時、限られた時間の中で何にどう取り組むかを漫然と悩み、何も成さない中途半端な状態を続けることが一番悔やまれるということです。選んだ場所で何かを成せるようベストを尽くし、とにかく前進し続ければ、応援してくれる人も現れ、後悔している暇はなくなります。この贅沢な環境での成長機会をぜひ逃さずに、4月から新しい体制になる研究室で、「都市デザイン研究室」の伝統を更新し続けて行ってください。私も自分にできることを探しつつ、刺激を与えられる側になれるよう、日々精進します。最後に、ご指導くださった先生方、いつも刺激を与えてくださった学生の皆さん、本当にありがとうございました！

西川 亮



▲ 博士課程ではプロジェクトにも参加できず、唯一の研究室への貢献は西村先生最終講義での写真撮影くらいでしょうか。

私からの研究室への置き手紙。研究に関して、先生方からいただいた言葉と自分の経験から次の言葉を残したいと思います。

毎日既往研究を1つ読むくらいのことはしましょう。(by 野原先生) 但し、建築学会梗概集や都市計画報告集ではなく査読付きの論文を選ぶこと。

社会を変えるくらいの意気込みで研究すべきだ。社会人博士は小さな山に留まりがちだが大きな山を築き上げろ。(by 窪田先生)

研究会議は相談の場である一方、先生方への挑戦でもあります。コメントを恐れず、寧ろ楽しんでみてはどうでしょうか。

研究会議は他人の研究を聞く場でもあります。他人の研究に対する質問を考え、先生方の質問との差、自分の思考の浅さを知ることが重要です。

流行に乗る論文ではなく流行を作る論文、そして流行に留めない論文を目指したいものです。人に聞いてもらいたいと思う研究を目指しましょう。本当に研究を楽しめれば、きっとその成果を色々な人に話したくなるものです。

修士論文の参考になるのは博士論文です。あらゆる博士論文を読み、博士論文に負けない修論を夢見ましょう。

研究は戦いです。相手は自分であり、研究室の仲間であり、先輩であり、社会です。少なくとも同期には負けるな！

修士論文はちゃんと都市計画学会に投稿しましょう。言い方を変えれば、少なくとも都市計画学会論文程度のレベルの論文を修士では成し遂げましょう。

修士を終えて、少しでも研究に未練があるならば、再び研究室の扉を叩いてみてください。きっとこの研究室は歓迎してくれるはずです。

矢吹 剣一



▲ 10Fからの眺め(見る度に時間が有限であることを感じる)

設計事務所を辞め、研究室に戻り丸3年が経つ。あまり話す機会はないが、高校時代は世界遺産の仕事に関わりたいと思っていた。学部時代は建築に憧れ、大学院は「都市デザイン」という言葉に惹かれ研究室の門を叩き、空き家と地区の再生を研究した。そして最後は「いかに都市をたたむか」を研究することになった。そんな一貫性に乏しい自分でも博士論文を書き上げられたのは、西村先生と研究室の懐の深さのおかげである。西村先生については、未踏の領域を切り拓く学者としての姿勢はもちろん、地域と向き合うその人となりに憧れていた。修士時代、足助では窪田先生に、高山では野原先生に薫陶を受け、プランナーとしての素地を作って頂いた。博士課程ではついに直人先生にも指導頂くようになり、伸先生にはPJや博士ゼミで、そして黒瀬先生には何と言っても米国の研究を通して、本当に沢山対話させてもらい、自立した研究者として生きるための体幹を鍛えて頂いた。無論、歴代の助教の方々や研究室の仲間からの言葉は、常に刺激を与えてくれた。

博士研究は想像通りの厳しさで、生活それ自体も精神的・体力的・金銭的に楽ではなかった。しかし一片の迷いもなく研究に打ち込めた理由を挙げるとすれば、結局のところ、現場を歩き、仲間と共に悩み、机に向かい頭と手を動かす日々が好きなのだと思う。そして自分では退路を断ったと言いつつも、都市デザイン研究室の包容力や研究室の仲間の実直さに感化され、衝き動かされたからこそここまで辿り着けたのだと今更ながら感じている。先生方、修士・博士の仲間、研究室に関わる皆さんに心から感謝したい。

さて、とは言え、この居心地の良さいつまでも甘んじるわけにはいかない。今後も都市の現場に実直に向き合い、都市デザインの裾野を広げていかねばならない。そして、これからも時折、仲間と再会し、心の底から共感し合えるのが今から楽しみで仕方ない。「これまで」のように熱い「これから」が続いていくことに期待したい。ともに頑張りましょう。

森 朋子 助教

2010年、博士課程に入学してから、約8年お世話になりました。西村先生に初めてお目にかかったのは、その年の5月だったと思います。研究室にお邪魔した時の先生の第一声が、「何でしたっけ？」でして、えっそんな・・・と驚いて肩の力が抜けた一瞬を今でも鮮明に覚えています。その後、ものすごいスケジュールの中、時間を割いて頂いたことを知るわけですが・・・。それまで、私は不動産開発に従事していました。2008年のリーマンショックから経済の変化に敏感に反応する都市開発に疑問を持ち出した頃、ふとしたきっかけで伊豆諸島の新島に行きました。こんな暮らしもあるのかと、丸の内まで悶々とした日々を過ごしていた私は、島で堂々たる日常を過ごされている皆さんからの笑顔の挨拶に、大きな衝撃を受けました。経済的価値からは計り知れない、何か大きく大切なものがこの世の中に存在することを肌で感じ取った瞬間です。その後の私は、ある意味後ろを振り返ることもなく、自分を信じて前に進みました。その中の一つの選択肢が、博士課程への進学だったのです。その時は、大学の教員になることなど、頭の片隅にもありませんでした。ただただ、自分が感じた何か大きく大切なものを守る仕事に就きたい、その一心で、ここまで何とか来ることができました。そして、これからもその気持ち（これぞ信念ですね！）を軸に、頑張ろうと思います。ありがとうございました。またどこかで！



▲ 2010年の研究室旅行（中国・南京）
入学直後、思い切って参加した研究室旅行。帽子（種類が豊富！）が定番の永野さんに矢吹さん・・・そして助教として戻られた黒瀬さんと一緒に自己紹介した、思い出の一枚です。

西村 幸夫 教授

研究室への置手紙

最終講義でも言ったのですが、都市には多様な人が生活をしており、それぞれの人の都市に対する思いも多様だと思います。

ただ、共通して言えることは、どのように都市生活者のありようが多様であったとしても、それらの生活が展開される器としての都市の公共空間はひとつであるということです。そのひとつの器にさまざまな思いが込められるのですが、それらすべてを受け止めるような空間にかかわる仕事をするとは、じつにやりがいのあることだと思います。

また、現場から、運動論、制度論、手法論とやってきて、じつはその先には、こうした手法を使って空間を実際にデザインしたり、実装したりするところには論理では表現できないジャンプがあります。すくなくともこのジャンプの様相くらいは表現したかったのですが、そこまでは行きつきませんでした。今後の課題として残っています。このあたりは、研究室に残ったメンバーのどなたかにやってもらえるといいなと思っています。皆さんの今後の活躍を期待しています。

私自身はこれから人生の新しいステージに向かいますが、どこかの現場でまた個々のデザイナー・プランナーとしてのOB/OGにお会いできることを楽しみにしています。

西村 幸夫





最後の登壇 - 西村先生最終講義 -

Prof. Yukio Nishimura Gave the Final Lecture.

3月16日、本郷キャンパス伊藤国際学術研究センターにて、西村幸夫教授退職記念シンポジウムおよび西村教授の最終講義が実施されました。

退職記念シンポジウムは、全3回のうち「アジアにおける都市保全の展開～アジアの風景計画」「歴史を生かしたまちづくりの到達点とこれから」の2回が連続開催され（第1回は昨年12月に実施済）、多くの聴衆の前で白熱した議論が展開されました。

シンポジウムの後はいよいよ西村先生の最終講義。会場には続々と聴講者が押し寄せ、大勢の立ち客に囲まれる形で講義は始まりました。講義は西村先生がこれまでの研究者人生を振り返りながら節目となった出会いや出来事を紹介し、そこから先生が学んだことに迫るという構成で、会場を幾度も笑いの渦に巻き込みながら閉幕。鳴り止まない拍手が印象的でした。

そして最終講義の後は「西村先生を囲む会」と題して、先生に縁の深い方々や研究室OB・OGを交えたパーティーが盛大に行われました。

詳細はwebマガジンにてお伝えしています。

安田講堂前で記念写真を撮る M2



3月22日に学位記授与式が行われました。都市デザイン研からは博士過程学生3人、修士課程学生5人、まちづくり大学院から2人が出席し、都市工学科代表の小泉秀樹教授から学位記を授かりました。式の後は例年通り、神楽坂にて追いコンが開催されました。

A Commencement Ceremony

学位記授与式 & 追いコン

年度末 FLASH 報告

式に、コンバに、旅行に、慌ただしい研究室そんな年度末の様子を写真でご報告します！

修士卒業旅行

A Graduation Trip by Master's Students

マガジン総集編 + 日めくりカレンダー、発行！

The whole set of volumes of UD Lab. Magazine Published

西村先生の退職に際して、13年間のマガジンの歴史も1つの節目を迎えます。これを記念して、製本された総集編を作成しました（3月特別号参照）。また、今年の卒業生連名でのプレゼントは、「都市デザイン研究室を作ってきた言葉」と題し、過去から今までの研究室の面々が発した365個の言葉をちりばめた、手作りの日めくりカレンダー。研究室の「今」を伝え、そしてアーカイブするという、マガジンの持つ意義をはからずも肌で感じる作業でした。

マガジン編集部及び、三文字君をフル動員し、完成。



見晴らしがよいところに居場所がある /Lisbon, Portugal

神谷



どのショーウィンドウにも不思議と、1点物のような凝った服。この服が作られた経緯を知りたいと思う /Placencia, Spain

松田

—モロッコ&南欧ベストショット4選—

三文字

中村



路上のスープ屋さんで老若男女みんな集まり、カタツムリをほじくって、去って行く。いつもの街の風景。 /Tetuan, Morocco



偶然出会ったラバトの夜の日常景 /Rabat, Morocco

3月4日より11日間の日程でモロッコ・スペイン・ポルトガルの3か国を周遊。田中が諸事情につき不参加、松田が怪我で途中参加となるなど波乱の幕開けとなりましたが、3000キロをレンタカーで駆け巡り、無事帰国を果たしました！



Information

Archives - 4月のweb記事



3.05 第7回ヘリテージ mtg 開催！
恒例となる高島平での mtg、今回は団地だけでない広域の範囲に視線を向けました (M1 但馬)



3.16 西村教授 最終講義&シンポジウム
鋭意作成中 (M1 松本)



3.22 修了式と追いコンが開催
研究室の多くのメンバーが集立つ一大イベントを、写真たっぷりで紹介いたします (M2 田中)



3.24 UDCS 坂井の拠点が完成！@三国
竣工記念フォーラムと、新センター見学会が開催される。三国祭も、徐々に近くなってきました (M2 神谷)

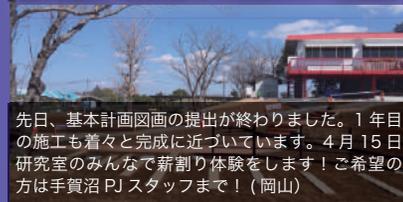
Project Headlines -PJ 近況早わかり-

Web 記事もご覧ください。http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/



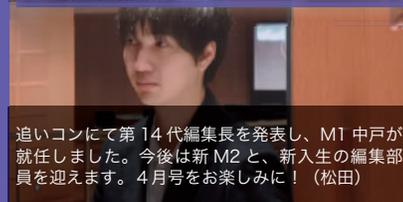
Hey listen, -ちょっと聞いて!

施工間近! ぜひきてください! 手賀沼



先日、基本計画図画の提出が終わりました。1年目の施工も着々と完成に近づいています。4月15日研究室のみんなで薪割り体験をします! ご希望の方は手賀沼 PJ スタッフまで! (岡山)

新編集長決定! —編集部より



追いコンにて第14代編集長を発表し、M1 中戸が就任しました。今後は新M2と、新入生の編集部員を迎えます。4月号をお楽しみに! (松田)

4月の予定

- 4/10(火) プロジェクト報告会
- 4/11(水) 第1回研究会会議
新M1 新歓コンパ
- 4/18(水), 4/26(木) 研究会会議

✧ 編集後記

このコーナーもそうですが、研究室の節目でも自分の節目でもあるために、最近文字を書けば総括ばかりしている気がいたします。総括する分だけ努力してきたかな?と考えると少しブルーに……。ただ努力はさておき、掛けがえない時間を過ごしたことは、胸を張って肯定できます。さて、2017年度のマガジンに1年間お付き合いいただき、ありがとうございます。来年度、中戸新編集長のもとで改革に燃えるマガジンを、どうぞよろしくお願いたします。(松田)



URBANDESIGN
LABORATORY